

物部川復旧に「近自然工法」

2018年7月の西日本豪雨で破壊された物部川の復旧工事で、生態系に配慮した「近自然工法」が導入された。施工スピードと治水機能が優先される災害復旧工事で、地元漁協の要請で国土交通省が受け入れた。アユなどが好む瀬造成され、5月15日のアユ解禁日以降、釣り師たちが復活し、好漁場を謳っている。

(八田大輔)一面参照

アユ漁が解禁した5月に流れが変化している。15日午前、香南市土佐山、その隣に、長い竿を田町戸板島の「戸板島」を持った太公望が笠を、針橋から上流を望んだ。に掛かったアユが次々に狙った下流に、に宙を舞う。仲間同士で釣果を見せ合い、楽しそうに話さずにはなれない。川底の凹凸をりたりと所工事が始

単純な水路に：削って平坦に変えた。国交省道板島橋周辺など河口から約10の区間で18年9月から復旧事業を開始。川岸が浸食が激しく、堤防が漏水したため、川底の凹凸を削り、平坦な水路にした。



近自然工法で大小の石が配置され清流再生。アユ釣りの好ポイントが復活した。(香南市、土佐山田町戸板島から撮影、5月15日午前)

異例の採用 官民で実現

漁協「工事のモデルに」



保つため、国交省高知河川工事事務所に対し、戸板島橋周辺、やや上流現場では、大きな岩をつがすみやすい環境がつくられていた。新たな必要となったのは、単調に見え川岸約一平方メートルの費用、災害復旧事業の予算内で賄うことができたこと。今後の増水を前に、工事が進められ、復旧事業の準備が整った。

瀬の造成に当たっては、現場に流出していた石が徐々に動き、その下に埋め込まれた。アユ漁協の河川工事担当者は「アユ漁解禁に間に合わせるには、川底を削り、凹凸のある河川にしたい」と話している。

現場では、大きな岩をつがすみやすい環境がつくられていた。新たな必要となったのは、単調に見え川岸約一平方メートルの費用、災害復旧事業の予算内で賄うことができたこと。今後の増水を前に、工事が進められ、復旧事業の準備が整った。

瀬の造成に当たっては、現場に流出していた石が徐々に動き、その下に埋め込まれた。アユ漁協の河川工事担当者は「アユ漁解禁に間に合わせるには、川底を削り、凹凸のある河川にしたい」と話している。

「被災は大きく、工事は総額約3億5千万円を要する。計画の認可を受けた物部川漁協の松浦秀雄組合長は危機感を募らせた。

「治水目的で川岸を削って、生息物があふまない単調な水路になってしまう」。ダムにたまる土砂(アユ)がもたらす長期水も含まれている。回復を望んでいる。回復を望んでいる。



重機でつり上げた岩を川底に埋める。位置を確認し、何度も置き直して固定していく。(香南市土佐山田町戸板島、3月26日午後)

河川整備を巡っては、1997年の河川法改正(河川の排水は環境目標が目的に追加された)がきっかけで、漁業再生の推進が図られた。その中で、河川法の改正が実現した。3者の協力で実現した。3者の協力で実現した。



瀬の再生工事の仕上げ直前。すでに川底に石が投入されているが、また自立した変化はないように見える(同、2020年2月14日)。西日本豪雨が川底の凹凸を洗い流し、川の中は中小の石ばかりに、瀬もほとんどなくなっていた(同、2019年2月、有川崇さん提供)。西日本豪雨で被害を受けた直後の物部川の戸板島橋周辺。護岸のために設置されていた大岩が崩れた(2018年7月、国土交通省提供)。